

しあわせの根まんだら

題字 山折 哲雄

第2号 2011年7月1日
発行 近江八幡商工会議所
会頭 秋村 田津夫
所在地 滋賀県近江八幡市桜宮町231-2
発行数 31,000部
TEL 0748-33-4141

経済成長のジレンマから

本当の意味で

幸せな未来へ

幸せ経済社会研究所 所長
環境ジャーナリスト

枝廣 淳子



枝廣 淳子 (えだひろ じゅんこ)

東京大学大学院教育心理学専攻修士課程修了。
通訳者、翻訳者、環境ジャーナリスト。著書「枝廣
淳子の回収ルートを探る旅」、「朝2時起きで、
なんでもできる!」、「環境ビジネスウィメン—
11人 成功の原点と輝く生き方」

これまでほとんどの人が「経済成長は社会のために必須だ」と考えてきました。しかし近年、温暖化をはじめとする環境問題の影響が明らかになるにつれ、経済成長やGDPや、真の幸せのための経済や社会のあり方についてじっくり考えようという動きが盛んになってきました。

地球温暖化も生物多様性の危機も、問題の「症状」のひとつに過ぎません。こうした多くの問題を引き起こしているのは、有限の地球のうえで、無限の経済成長を求める構造ではないでしょうか。

私たちは、農作物や水、木材や鉱物などさまざまな資源を地球から取り出し、加工して消費することで経済活動を営んでいます。私たちの暮らしや経済社会から出るゴミ(CO₂)やさまざまな廃棄物は、地球に吸収してもらっています。

こうして私たちの経済活動を「供給源」かつ「吸収源」として支えてくれている地球は、46億年前に誕生して以来、少しも大きく変わっていません。つまりその大きさには限りがある——「有限」なのです。とすれば、地球の「供給源」も「吸収源」も有限だということです。有限の地球上で、経済がいつまでも成長しつづ

ければ、いつか必ず、地球の限界にぶつかります。

この50年間に世界経済は5倍以上に成長しました。それに伴い、食糧の生産量は約2.5倍に、水の使用量は2倍に、パルプと紙の生産のための木材伐採量は3倍に増えています。

世界中で紙の需要はどんどん増えているのに、原料の木材(森林)が同じスピードで成長できなかつたら?世界の森林は減っていきまます。まさにそれが起こっているのです。降った雨が地面から浸透し、地下に溜まる速度よりも速いペースで地下水を汲み上げたとしたら?地下水はいつかからつぽになり、それ以上汲み上げられなくなるでしょう。いままさに世界各地でそれが起こっているのです。

私たちの経済活動は、有限の地球が支えられる範囲内でしか続けることはできません。しかし、私たちの経済はすでに地球の支えられない限界を超えてしまっています。それでも、今なお私たちは経済を成長させようとしているのです。一方で、現在の社会や経済の構造が成長

講演のお知らせ

1

生命に学ぶ、自然に学ぶ
まちづくり、ものづくり

公立大学法人滋賀県立大学 理事 副学長
講師 仁連 孝昭氏

幸せな未来のつくり方
幸せと経済と社会との関係を見つめなおす

幸せ経済社会研究所 所長
講師 枝廣 淳子氏

日時 平成二十三年七月十六日(土)
一時半~四時

会場 ホテルニューオウミ

定員 二二〇名 定員になり次第、申し込みを締め切ります

四者連携によるまちづくり

去る4月に産官学民の連携によるまちづくりをめざして、近江八幡市と滋賀県立大学、安土町商工会、近江八幡商工会議所の四者で連携協定を締結し、6月には四者と学識経験者として組織する「まちづくり懇話会」を設置したところです。

四者は、従来からそれぞれがまちづくりに取り組んできていますが、今回の協定によって取り組みの輪を広げ、文化振興・産業振興・地域活性化省エネルギー型のくらしなど、地域社会の発展と人材育成に相互協力していきます。当協定にもとづく取組のテーマのひとつに「自然を尊び、自然に学ぶ」を掲げています。今回の大震災により、「人間が自然とどのように関わり、共存するのか」、また「大量のエネルギー消費型の今の暮らしをどのように転換するのか」など、「安全・安心のまちづくり」の視点からも議論と連携が必要と考えています。

社会を築いていくか「社会の真の進歩や幸せを何によつて測るのか」は、今後の政府、自治体・企業をはじめとするあらゆる組織、そして私たち一人ひとりにとつて避けることのできない課題です。

今回の東日本大震災は、短期的な経済効率だけではなく、中長期的なレジリエンス(しなやかな強さ)が社会にとつても、企業や個人にとつても大事であることを明らかにしました。

- どうやつて私たちの時間軸を伸ばしていけるのか?
- どうしたら現在の指標を変えていけるのか?
- 地域の力とは何か?
- どうやつてそれを作り出していくことができるのか?

どれもこれから答えを作っていくなくてはならない大事な問いです。みなさんと一緒に考えを深められることをたのしみにかけています。

「商売は菩薩の業、商売道の尊さは、売り買ひいずれをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの。利真於勤(りはつとむるにおいてしんなり)」

これは現代の商社「丸紅」創始者初代伊藤忠兵衛の座右銘です。商いの目的はお金もうけではなく世間を益すること、そのためには世間の不足をうずめることであり、これは御仏の心そのものであるという考えです。これは仏教の原点でもある「諸法無我」の教えに通ずる考えであり、自然の理にかなったものであると思います。

一方、今、世の中はお金でお金をうみだし、時価総額の極大化をはかることが経営の主たる目的である風潮がはびこっています。しかしこれは商いの原点からおおきく外れた行為であり、極論すれば人類のおこりだと思えます。

このおこりが結局自然を破壊し、人心を醜いものにし、殺伐とした世の中を作り出しているのではないのでしょうか。自然とは優しくするものではなく、おそれ敬うものであると考えます。

幸せとは何かを思った時、それは一人ひとりが足るを知り、諸行は無常であるという考えからしか生まれないのではないのでしょうか。

近江商人の「世間よし」とは商いを通じて美しい心の世間を作り出すことにあると思うのです。

近江八幡商工会議所 副会頭 尾賀 康裕

アスクネイチャー ジャパン 設立レセプション

バイオミキリー・インスティテュート 理事長 ジェーン・M・ニコラス氏を迎えて

日時 平成二十三年七月七日(金) 一時~

会場 ホテルニューオウミ

※お問合せは、近江八幡商工会議所まで

ひらめく・つながる

あすナビ
asu8man.jp
も見てね。



5月15日に開催された第1回あすナビカフェ。
そこで出た数々の願い、そして新しい出会い...
innovation.
新しい関係を発見しよう。

「風景」は……

旅行作家

西本 柳枝



今から十五・六年前である。安土の小学四年生の男の子が「ボクの宝物は夕日に光る西の湖です」という意味の作文を書いていて、この子の感性の透明さにいたく感動したことがある。以来、西の湖を見るとその坊やのことを思い出すのだが、平成十八年一月、この西の湖周辺が国の「重要文化的景観」に選定されたときも、その坊やのことを思い出した。今はきつとカッコイイ青年になっているだろう。その坊やが、小学生のときに書いた作文など覚えていないかもしれないが、おばさんはあなたの書いた作文、覚えてるよ、と……。

重要文化的景観。選定された名称は「近江八幡の水郷」で、白王町、円山町、北之庄町、南津田町の約354ヘクタール。あの坊やが「宝物」と思っていた辺りの風景は今後も、彼の好きな風景のままではあるはずだ。へ文化的景観とは、たとえば仏像や書画：等々の文化財とは違う。《人が日々の暮らしを通して残してきた景観》を言い、その中でも特に《日本の暮らしを理解する上で欠かせない重要な景観》が《重要文化的景観》と定義されている。現在全国で二十一件が選定されているのだが、第一号がこの「近江八幡の水郷」であった。つまりここは、日本の生活や生業の原点を包含し、守り伝えられている地なのである。西の湖の北西隅に残る湖上の飛び地「権座（ごんざ）」など（ごんざは字名）、今も田んぼに行くのに田舟で渡る。

「暮らし」というものは、この環境の中で構築されるものである。この環境で生を受け、育ったものがこの環境の生き物たちなのである。生き物は気候や地形や地質や……いろんな自然条件のもとに生命をつなぎ、暮らしを築く。動物も植物も、もちろん人間も。環境が変われば暮らし方も変わる。小さな生き物たちはその影響をすぐ受けつけてしまうが、人間は環境が変わってもなんとなく馴れ込んでしまう。影響はすぐには判らない。長い長い宇宙時間をかけて変わっていくから、危機意識は甚だ緩慢だ。その結果、この環境より《便利》を選んではしまう。

そんな中で風景も大切な

「宝」だと認識されるようになった。重要文化的景観である。そうなる風景は勝手に変えられない。風景を守りたい、という人々の願いがこの風景を「宝」にしたのだが、それは困る、という人もあるだろう。

「宝」になると、暮らしに些かの制限がかかる。だから、ホントは

こんな広いエリアに「宝」の網を被せるなんて、大変なことなのである。それを成し遂げたのは、へド口のたまった八幡堀を蘇らせ、眠っていた近江商人の屋敷を目覚めさせた近江八幡の人々の意識の在り方……と考えると、八幡堀再生は、八幡堀を蘇らせただけでなく、人々に「考える」こと、「行動する」ことの大切さを明示した運動だったかもしれない。

序でながら、近江の先人の一人に日本の陽明学の祖中江藤樹がいる。陽明学の論に「知行合一」という考えがある。「知識と行動は同じであつてこそ」という意味である。つまり、「知つていて行動を起さないと知らないのと同じ」という意味だが、近江八幡では人々が動いたのである。十数年前の小学四年生は今、二十五・六歳……のはず。近江八幡の《次なる力》が確実に育っているのではないか。

風景。それは人が守っていくもの。そして風景は人を育ててくれるもの、と私は考えている。それを感じさせてもらえる町は「風がいい町」。吹く風はもちろん、風景、風情、風貌、風格、そして風土……。「ボクの宝物は近江八幡の風です」……なんて言う子どもたちがたくさん出てくる、といいな、と思う。

因みに、中江藤樹を師と仰いだ熊沢蕃山の祖母は近江八幡桐原出身で、蕃山も若い一時期、桐原に住んでいた。近江八幡に知行合一のDNAを感じる理由の一つである。

西本 柳枝 (にしもと なぎえ)

日本バンククラブ会員・日本詩人クラブ会員。
主な著書に各地の旅のガイドブックのほか、「鳩の浮巢」(サンライズ出版)「湖の風回廊」(東方出版)や詩集など。



日本の里百選円山の風景(琵琶湖ヨシ紙にヨシペンで描く;井上弘)

『近江八幡の水郷』

成安造形大学附属近江学研究所
研究員

加藤 賢治



天正十三年(1585)、琵琶湖の中央部東側に豊臣秀次が八幡城を築城し、現在の近江八幡市の歴史が始まった。秀次がこの土地を選んだ最大の理由は水利である。東西を結ぶ街道に近く、町の中心部から西の湖を通じて琵琶湖に船を出すことができる点は、楽市(信長や秀吉が城下で行った自由経済政策)を設定して商人を呼び寄せるに最も適していたといえる。秀次は早速八幡堀を開削し、商人を定住させて活発な町づくりを行った。

文禄四年(1595)に八幡城は廃城となるが、町はそのまま残り、そこで活躍していたいわゆる近江商人はこの地の利を活かして近世に発展を遂げた。

この地の近江商人(八幡商人)は湿地に群生する湿性植物を原料とする畳表(近江表)や麻織物(近江上布)、蚊帳、簾、よしずなどを全国に商品として流通させた。

「ふとんの西川」で知られる西川産業(株)の創業者西川仁右衛門は秀次の楽市令で八幡に移住した商人の一人である。二代目西川甚五郎は取り扱う商品を地元で大量に産出されるイグサを原料とする畳表と蚊帳に絞り、販路を東日本に広げた。そして豊臣氏から徳川氏に覇権が移った後の元和元年(1615)、五街道の拠点である江戸日本橋に店を出し西川家発展の礎を築いた。

近代に入り鉄道が敷かれ、自動車道が整備されるようになると物流が変わり、近世の八幡の発展は陰りを見せた。しかし、この町がそのまま近代化されなかったことはかえって幸運であったかもしれない。町の中心は鉄道や自動車道の側に移つたため、近世の城下町の雰囲気自然なまま残ったまま保護されたのである。

特に八幡堀から西の湖、そして琵琶湖に繋がる水郷は「近江八幡の水郷」として平成十八年(2006)、国の重要文化的景観の第1号として選定された。現在、近江八幡市白王町、円山町、北之庄町、南津田町他の公有水面、草地、集落、農地、里山を含む約354ヘクタールが重要文化的景観となっている。

この景観の中に含まれる西の湖の湖上に「権座」と呼ばれる約1.5ヘクタールの小さな離島がある。西の湖の湖岸はヨシの湿地が広がっており、近世から村人は農地を広げるために、日常的に「地先」と呼ばれる湖に面した村落の湿地帯を埋め立てていた。「権座」は白王町と円山町に挟まれた沖合にあり、このようにヨシを埋め立ててきた農地である。現在は白王町の住民が酒米をつくっているという。権座に架かる橋はなく、今も田舟を使って農機具を運んでいるが、危険性の問題や一般的な農地に比べて耕作に費用がかかるため、耕作面積は減つてきている。

加藤 賢治 (かとう けんじ)

1967年 京都生まれ。
立命館大学卒業。佛教大学大学院修了。
滋賀県立大学大学院後期博士課程単位習得 退学。
成安造形大学附属近江学研究所研究員として、近江(滋賀県)をフィールドに宗教民俗の研究を続けている。

近年その「権座」での耕作を守ろうという運動がある。コンクリートでなく自然の岸を持つ権座で耕作をすることは、琵琶湖や西の湖に住む固有の生物の窠をつくり、栄養分を供給することになる。生物多様性が叫ばれる中、権座やヨシの湿地を保護し、近世の生活の慣習を見直すという動きは、大変重要なことである。

近江八幡の水郷の風景はなぜか見る人の心を和ませてくれる。人はその水郷の風景をかたちとして捉えているのではなく、視覚的には見ることはできないが、その水面下にある生態系の循環も含めて感じているのではなからうか。かたちとして見える景観だけでなくそこで生活する人々の営みも含めて後世に伝えていかなければならないと感じた。